

# 猫のゴンちゃんストラットフォードをめぐる

## —1月の4つのエピソード

寺 内 一

### はじめに

伊藤典子教授の退官記念の研究紀要に拙稿を掲載する機会を与えていただきまして本当にありがとうございます。応用言語学の一領域である自分の専門の English for Specific Purposes (ESP) という英語教育そのものの論文ではなく、1991年の留学以来（ウォーリック大学）、25年間通い続けているわが第二の故郷である英国のストラットフォード・アポン・エイボン（以下、ストラットフォード）での生活を異文化理解という観点から物語風に描いてみたいと思います。

英国の庭ともいえるストラットフォードに日本からやって来た猫のゴンちゃん（主人公で我が家の愛猫の本名、現在18歳）が、初めて出会った地元の猫のピーターと、ストラットフォードの街にあるパブをめぐりながらビール（ビター）を飲み交わしていきます。ロイヤル・シェイクスピア劇場で演じられるシェイクスピアの劇をはじめとして、その月にストラットフォードで行われるイベント情報を聞きつけて、その催しにピーターと参加していきます。英国文化のひとつの象徴でもあるパブを基点にして、最終的にはストラットフォードの案内とともに英国生活の1年間の流れが理解できるようになることを目的としており、本稿では、1年の最初の月である1月におけるストラットフォードの4つのエピソードを元日から時系列に並べてみました。これが2月以降も続いていくというのが本来の企画で、将来的には本にする予定です。参考までに2月以降のイベントを並べておきます。1月 New Year's Day, 2月 St.Valentine's Day, 3月 Cheltenham Races, 4月 Shakespeare's Birthday, 5月 May Pole, 6月 City Festival, 7月 Buskar, 8月 Bulldog Bash, 9月 The Floral Competition, 10月 Mop, 11月 Bon Fire, 12月 Christmas です。

続編として、今回知り合った英国の猫のピーターを、ゴンちゃんが日本文化の象徴でもある京都の街を案内する『猫のピーター京都をめぐる』という新企画も準備しております。なお、本稿の4つのカットはすべてイラストレーターの松井寿男先生にお願いいたしました。

エピソード1 元日



© 松井寿男

「3, 2, 1, 0」カラーン, コローン. 午前0時の鐘です. 教会の鐘が新たな年の始まりを迎えようと鳴り響きました. シェイクスピアホテルの薄暗いバーの中で猫たちはみんな手としばをつないで伝統的な新年の歌を楽しそうに歌い始めました.

「古き友は忘れられて二度と心に戻らないものなのだろうか? 今からでも友情の杯をあげよう. 遠い昔の日々の為に!」

バーの中では, 日本から来たばかりの猫のゴンちゃん一匹だけが, 後ろの方で歌に合わせて体を大きく揺らしていましたが, 他の歌っている猫とゆっくりと前に進み出てきました. おそらくゴンちゃんの顔はいつもより少し赤かったのでしょう. ゴンちゃんは地元の猫よりも少し大きく揺れていたのです. でも今日は元日の前夜で, 特別な日なので多少のビールを飲むことは許されています. ましてや, 家から長い道のりを歩いて来たのだし, シェイクスピアホテルのイギリスのビター (強いホップの味のきいたビール) はとてもおいしいのですからね. そうはいつても, ゴンちゃんは少しホームシックにならざるを得ませんでした. 東京の家に行ったら, ゴンちゃんの家族は除夜の鐘を聞いて, 元日におばあちゃんのおうちを訪れるのを毎年楽しみにしていたからです.

まわりが騒々しい中で, 「明けましておめでとう!」一匹の猫が愉快そうに近づいてきました. 心の

こもったやり方でゴンちゃんの手をしっかりと握りながら、大声で言いました。「ぼくの名前はピーターといいます。お会いできてとても嬉しいです。」他の猫たちといっしょに、その二匹の猫は、古いホテルの由緒ある骨組みの角材が、楽しげでにぎやかな声で揺れるように感じるまで、新年の歌を大声で歌いました。部屋が少し静まった時ゴンちゃんは言いました。「ああ楽しい、でも、なぜ歌うのか全くわからないよ。」ピーターは笑いながら説明してくれました。「えーとね、僕たちは新年にはいつもこの歌を歌うんだ。これは何百年も前にスコットランドの詩人ロビー・バーンズによって書かれたものだよ。懐かしい友人との再会を祝って“auld lang’s ayne”を思い出しながら、皆でお酒を飲もうという意味なんだよ。“auld lang’s ayne”とはスコットランド語で昔の事や昔の時という意味だよ。」

シェイクスピアホテルに集まっていた猫たちは徐々に立ち去り始めました。ピーターは、彼らが“First Footing”に行ったことをゴンちゃんに説明しました。元日（1月1日）に友達の家を訪れるという古くからの伝統があるそうです。新年の初日に「最初の足」で誰かの家に入ることは幸運だと言われていて、伝統的には、最初の訪問者は「背が高く、黒く、ハンサム」であるというのが条件なのですが、少なくとも暖炉の炭とウイスキーを贈り物として持っていく必要があるみたいです。

二匹の猫は夜中までずっと語り続け、堅い友情で結ばれました。ゴンちゃんは、ストラットフォードとイギリスの習慣についての話を聞くことに興味を持ち始めました。それらの話をかなりの量のビターを飲みながら聞いていたのは言うまでもありません。「お休みなさい」を言う前にピーターから思いがけないお誘いがありました。「ゴンちゃん、伝統的なイギリス特有の元日を経験してみないかい？ぜひうちにおいでよ。ストラットフォードでの元旦の過ごし方を教えてあげるよ。」ゴンちゃんは思いがけない招待に大喜びしました。そして今日のまだそんなに早過ぎない、ちょうどよい時間に会うことになりました。ゴンちゃんは、雪の通りをくねくねとかなりの波を打ったような足跡をつけながら、歩いて去っていくほろ酔いの新しくできた友達が、夜の暗闇に消えるまで手を振り続けました。

思ったとおり、約束の朝は明るくさわやかに晴れた冬の日でした。ゴンちゃんはシェイクスピアホテルのロビーでピーターと会い、二匹の猫はピーターの家へ出発しました。お店はほとんどが閉まっていますが、通りはウインドウ・ショッピングをしたり、ジョギングをしている猫やご主人様に連れられて散歩をしている犬などでかなり混雑し始めています。ピーターによれば、伝統的にいえば、元日は、みんなが家から外に出て新鮮な空気を吸い、楽しむ時なのだそうです。もちろん、元日ですから、彼らが「新年の抱負」として、「禁煙する」とか、「もっと運動をして健康的な生活を送る」とかの誓いを胸に秘めていることは言うまでもありません。でもこれらの猫たちは明日にはもうここにはいないそうです。

まもなく彼らは、ちょうどストラットフォードの街のはずれにあるウェルカムヒルズのピーターの小さな家に着きました。彼らは、古い木でできたトボガンで遊びました。トボガンとは、雪で覆われたウェ

ルカムヒルズを滑り降りるそりの一種です。猫たちは、丘に登ってトボガンを使って猛スピードで降りては、もう一度「よいこら、よいこら。」と丘を登ったりしました。ゴンちゃんは、風にひげをくすぐられながら、トボガンで丘を流れるように滑った時にゴロゴロとのを鳴らして喜びました。そして、雪の玉を投げたり、猫の形をした雪だるまを作ったりして日いっぱい遊んだのです。

「なんておもしろいんだろう！」でも、大ブリテン島の1月の寒さはかなりのものです。お昼ごはんを食べて温くなる時間です。すぐ近くのスニッターフィールドと呼ばれる村の丘のふもとに小さなパブがあります。早速、そのパブに出かけました。ピーターはゴンちゃんに「季節のクリスマスの食べ物をつくって試食してみたらどう？」と勧めました。クリスマスは1月6日の「トゥェルプス・ナイト」まで12日間続くのだそうです。だから、そのパブはまだクリスマスツリーを飾っていたのです。ピーターは砂糖と香料を加えて温められたワインを注文しました。これは、ショウガ、シナモン、ナツメグや蜂蜜を混ぜ合わせた赤ワインです。その混合ワインは、火で赤く熱された火かき棒を突っ込んだ合金のマグカップの中に入っていてとてもあたたかいものです。シューとマグカップからよい香りの湯気が立ち、二匹の猫の凍った鼻が温められました。そして、彼らは克蘭ベリーソースの七面鳥の薄切りの肉やスタフティング（ハーブやスパイスを混ぜたもの）、さらにブランデーバターとクリームで厚く包まれたミンスパイを楽しみました。すべてがクリスマスの伝統的な料理なのだそうです。

時間が経ち、体が丸まってきて、今にも居眠りをしそうでしたが、ピーターは「次はスポーツのイベントに参加しなければならないよ。」とゴンちゃんに言いました。隣にいたピーターの友達の英国の猫のトムは「ボクシングデー」（クリスマスの次の日の12月26日）や元旦のような日にサッカーの試合を見るのがとても好きなのだそうです。ピーターがこっそりゴンちゃんに耳打ちしました。「あれがイギリスの猫のスポーツへの愛という伝統からくるものなのか、クリスマスからの長い監禁生活の後で、彼の奥さんと家族から逃げるための彼の願望が理由なのかはわからないけどね。」

ゴンちゃんとピーターは気がつくストラットフォード・ラグビークラブの本拠地があるパースクロフトの方向にあるストラットフォードの橋を渡り、エイボン川を越え、何百という男たちの群衆の中にいました。ゴンちゃんは、自分の黒と白のスカーフを夢中で振って、10マイル離れた町レミントンスパの住民たちより激しく、地元ストラットフォードのラグビークラブのチームの勝利のために喝采を送りました。実を言うとそんなにすばらしい試合ではありませんでした。選手の中には明らかに前夜に熱狂的に新年を祝っていましたが（かなり飲んでいたので）から。しかし、ゴンちゃんはそんなことはちっとも気にしないで楽しい一日を過ごすことができました。

ゴンちゃんは新しい友達ピーターにお礼を言って、ほとんど（完全ではありませんが）ホームシック気味になっていたことを忘れていました。日が暮れ、猫が集まってくるなかで、シェイクスピアホテル



の方向にぶらぶらと歩いて帰りながら、ゴンちゃんはこのストラットフォードという街を自分の第二の故郷として、12ヶ月間暮らしてみたいと思い始めていました。

## エピソード2 1月6日『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』



© 松井寿男

1月の第1週目の休日の後です。ほとんどの猫は仕事に戻っていましたが、ゴンちゃんはシェイクスピアホテルがまだお祭りの装飾をされていることに気づきました。緑色のモチノキ、白いヤドリギ、飾りリボン、風船やクリスマスカードがまだ楽しいお祭りの雰囲気漂わせています。ゴンちゃんは、バーでピーターに会った時に「お祝いはいつになったら終わるの。」と尋ねました。ピーターは「えーっと、クリスマスは伝統的には12日間だから、『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』の1月6日、つまり今日装飾を外すんだよ。もちろん、今では、12日間すべてお祝いをしてはいないと思うよ。だって、そうしたらとても疲れるからね。だから僕たちはお正月が終わるとすぐに仕事にとりかかるんだ。」と答えました。

ピーターはシェイクスピアが書いた『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』と呼ばれる演劇の説明を続けました。実際に、シェイクスピアホテルからちょうど歩いて数分のところにあるロイヤル・シェイクスピア劇場でその日の夜に上演される予定でした。彼らはその舞台を見に行くことができました。普通だと何日か前に、あらかじめ券を予約する必要がありますが、ピーターは予備の券を持っていたのです。「シェイクスピアの世界に招待されたらゴンちゃん、君は大喜びすると思うよ。」とゴンちゃんに話しま

した。

この『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』は、劇作家であるシェイクスピアが、エリザベス朝の時代に、クリスマスからトゥェルルス・ナイトまでを書いたものだという話をピーターはゴンちゃんにしましたが、その時代はかなり特別な時代だったそうです。演劇自体は一時中断されることもあったみたいです。この12日間は喜びや狂乱状態のために捧げられていたように、喜劇や催し物において、普通の時には決してやらない、つまり、正気では決してやらないことをすることが可能だったみたいです。実際、軍隊生活が12日間のクリスマスにすっかり変わったという習慣を表す名残りとして、将校たちは部下の兵たちにクリスマスの料理を提供することがあると言います。

シェイクスピアの劇である『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』は、空想の国のイリリア王国で、女性が男性に間違えられる等、正気でない世界を表しています。劇は、オーシーノ公爵がオリビア姫を、オリビア姫はセザーリオ（男装してヴァイオラと名乗るオーシーノ公爵の給仕）に、そのセザーリオがオーシーノ公爵をとという完璧な恋の三角関係になってしまうというストーリーです。『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』は魅力的な陽気な劇で、音楽と愛で満ち溢れています。オーシーノ公爵は「もし音楽が恋の肥料なら演奏を続けなさい。それを過剰なほど私にください。」と言います。劇自体はハッピーエンドですべての問題も解決しますが、『トゥェルルス・ナイト（十二夜）』自体がお祭り「恋のから騒ぎ」の終わりの合図を意味し、劇の根底には悲しみが隠されています。道化師が口ずさむ最後の歌はもの悲しさの繰り返しのフレーズがあります。「毎日、毎日雨ばかり。私たちはしばらく楽しく空想の世界を見ていましたが、もう『現実』に戻るのだと考えながら劇場を去るのです。」

こうして、ゴンちゃんはこの劇の背景についてピーターから教わりました。ゴンちゃんは喜劇を見るのが楽しみになってきたにもかかわらず、それを理解できないのではないかとすることが少し心配でした。ピーターに言いました。「シェイクスピアの英語は現代の英語とかなり異なっていると聞いたことがあるんだけど僕はお話についていけるかな?」。ピーターは笑って答えました。「心配しないで。僕はシェイクスピアの劇を30年間見続けてきたけれど、まだ劇で言っていることの半分も理解していないんだから。でも、問題ないよ。実際、シェイクスピアの時代でさえ、聴衆のなかでも教育を受けていない猫たちは多くのセリフがわからなかったんだよ。ゴンちゃんはシェイクスピアの劇にいろいろなものがあることがわかるよ、特に喜劇はね。お話の概説を読んでみなよ、そうしたら何が起きているか多少はわかるから、お芝居をくつろいで楽しめるよ。」

2匹の猫はロイヤル・シェイクスピア劇場の入り口に午後7時に集まりました（劇はたいてい7時半に始まります）。ストラットフォードには3つの劇場があります。その1つは舞台が前方にあって、観客に面している典型的な様式の大きな建物です。エイボン川に沿ってロマンチックな眺めのすてきな建

### 猫のゴンちゃんストラットフォードをめぐる（寺内）

物です。でもピーターは「大きい伝統的な劇場は最近ではそんなに人気はないんだ。」とゴンちゃんに言いました。近ごろの観客はバルコニーの高いところや、後ろの遠い席に座るのではなく、役者に接する近い席を好むのだそうです。そういったわけで、2007年に新しい劇場がストラットフォードに建てられました。そこは観客が舞台に近いところに座る作りになっています。

ゴンちゃんとピーターはストラットフォードのもう一つの小さいスワン劇場に行きました。そこは、ロンドンにあるシェイクスピア特有のグローブ座と同じ設計で建てられています。ゴンちゃんはただちに反応しこう言いました。「うん、知っているよ！東京にもグローブ座があるんだ。そこは円形に建てられていて観客は舞台の周りに座るんだ。みんな近いところで見たり聞いたりすることができるんだよ！」

ベルが鳴り、「上演は3分後に開始します。」というアナウンスがありました。すぐに2匹の猫は、シェイクスピアの時間まで遡って、時代を超越した喜劇に大笑いをしていました。確かにゴンちゃんはすべてを理解することはできませんでしたが、すばらしい晩を過ごしました。そして彼はストラットフォードにいる間、なるべく多くのシェイクスピアの演劇を見ようと心に誓いました。

### エピソード3 1月15日「チッピング・カムデン訪問」



© 松井寿男

ゴンちゃんとピーターはお互いに頻繁に会い始めていましたがこれは驚くことではありません。とい

うのも、シェイクスピアホテルがピーターの「行きつけのパブ」で、週末や仕事の後には必ず飲みに行ったり談笑したりするところだったからです。彼らは、1月のうらかな明るい光が射す日に、偶然シープストリートで出会い、ピーターが突然ある提案をしました。「ゴンちゃん、ちょっとチップング・カムデンまで車で出かけないか。ストラットフォードから約10マイルかそこら離れた小さな町なんだけどきっと気に入ると思うよ。そこは『イギリスで一番美しい村』と言われていてね。ハイストリート沿いに歩くとその綺麗さに君は本当に後ずさりしてしまうと思うよ。実際に映画でもその場所はよく使われていて、『プライドと偏見』のような最高峰のイギリス小説の映画の多くはその背景としてチップング・カムデンをよく使うんだ。行くよね？」

「もちろん！」ゴンちゃんは快くうなずきました。そして2人の同志はピーターの古びた車でストラットフォードを出発しました。途中で、ピーターは、チップング・カムデンがストラットフォードの南西の静かな丘のコッツウォルズ地方にあることを説明しました。これらの丘は平坦でどつどつはしていませんが多くが芝で覆われていて、魅力的な昔の面影をそのままに残している小さな町をとり囲んでいます。ピーターによれば、チップング・カムデンの黒と白の木造の建物はゴールデンイエローやハニーブラウンのコッツウォルズ地方の石で建てられているそうです。「今日のように天気の良い日は、コッツウォルズ地方の石は太陽光線の様に照り輝いて見えるよ。だから冬には暖かさや蜂蜜のにおいを感じるし、夏には通りがその日の太陽で覆われているように見えるんだよ。」まだ1月だというのに、夏に観光客が訪れるこの町に対するピーターの詩人のような言葉にゴンちゃんはちょっと感動していました。

ピーターは急に詩から歴史に話題を変え、チップング・カムデンがコッツウォルズ地方の羊毛の町のひとつであることを説明し始めました。中世の、産業革命の前、羊毛はヨーロッパへのイギリスの主な輸出品でした。イギリスの羊毛、特にコッツウォルズ地方の羊毛はとても質の良いものだったそうです。これらの小さな町の羊毛商は14世紀に裕福になり、彼らは地元の石からとても立派な家を建てるのが出来たのです。これらの家々は大きな宮殿ではなく、そうした猫たちの暮らしに見合った見事につりあいとれている建物であることをピーターは指摘しました。そうした家を建てた大工の親方は、現地の材料であるなめらかできらきらと輝くコッツウォルズの石に感動させられ、家の建築を続けてきたようです。ピーターはこの名講義の後、一息つきました。

ゴンちゃんは目の前にある聖ジェームズ教会に大感動しました。本当に印象的だったのです。この教会はゴシック建築の垂直様式で建てられた羊毛の教会のひとつで、地元の羊毛商が彼らの繁栄を感謝するのに作られました。そんな教会をこうした静かな町で見つけられるなんて本当に驚くべきことだとゴンちゃんは思いました。高いステンドグラスの窓にさし込む弱い冬の光のように、明るい色をした破片を放射している高価な宝石の中にいるかのごとく、また自分が大聖堂にいるようにも感じていました。ゴンちゃんはピーターの詩に影響を受け始めていたのかもしれない。



彼らはハイストリートを通り抜け、繊細な型で作られた骨董品や羊毛店や、彫られた家の石造建築屋などのウィンドウ・ショッピングをしました。ピーターは屋根の上のガーゴイルを指さしてゴンちゃんの注意を引きつけました。ガーゴイルとは仮面をつけたような彫像で、その開いた口から屋根の雨水が流れ出ることをゴンちゃんに話しました。ゴンちゃんは、それらのうちのいくつかの像がライオンやトラの形をしているのを見て楽しくなりました。実際、アフリカにいる遠いとこのレオのことを思い出させてくれたからです。そして彼らはハイストリートの中心にある出入り自由の「マーケットホール」に来ました。これは貿易業者が売買するために1627年に建てられたものです。ゴンちゃんは、当時の人々がそのホールでぎゅうぎゅう押し合って、羊毛や野菜やイヴシャム（イギリスの一番果物を産出する地域）の近くでとれた果物等を生き生きと売買している様子を想像していました。実際にこの町の名前の「チップング」は「マーケット」を意味するのだそうです。

午後4時です。お茶の時間です。ピーターはハイストリートに面する格調の高い弓形の出窓があるごく小さな喫茶店へゴンちゃんを連れて行きました。彼らが小さな艶のあるオーク材のテーブルに向かい合って背もたれの高い木製の椅子にゆったりと座った時、ピーターは伝統的なコッツウォルズのクリームティーの楽しみ方を説明し始めました。イギリスではティーは飲むというだけでなく、昼食と夕食の間に摂る食事にも指すのだそうです。気分をさわやかにしてくれるティー（紅茶）は繊細に模様が描かれたウースターのティーポットと調和がとれたカップと共に運ばれてきました。ピーターは3分間熱湯を入れた状態にし、新鮮なミルクを少しカップに注ぎ続いて熱いお茶を入れました。先にミルクを入れるのが伝統的だということ説明してくれました。その方がティー（紅茶）の香りが良くなるという説もあるし、最初の中国のティーカップがティー（紅茶）の熱さでひび割れてしまったので、最初に冷たいミルクを入れて高価なカップを守ったという説もあるそうです。ピーターはゴンちゃんに右の手のかぎづめでカップを上品につまみ、空中にかざすという礼儀正しいティー（紅茶）の飲み方を教えました。ゴンちゃんにとっては、最初はとても難しかったですが、ティー（紅茶）を飲むマナーをマスターすることができ、本当のイギリスの上流階級の猫になった気分でした。そして、クリームティーの最も大事な部分がやってきました。小麦粉のスコーン（柔らかく平らで丸いパンケーキ）で、完全にケーキではなく完全にパンでもないのですがとてもおいしいものです。バターに加え、こんもりと厚くサワーテッドクリームをのせ、さらにスプーン1杯のイチゴジャムを塗ります。2匹の猫がどんなにクリームティーを楽しんだか想像できるでしょう。実際に彼らは、さらにポットを2杯、お持ち帰り用にもう1杯のポットを注文したのでした。

ピーターは「このようなおいしい食事の後には、少し運動が必要だよ！」と言い、チップング・カムデンの町のはずれまで運転して、ゴンちゃんとドーバー・ヒルを散歩することにしました。その壮大な眺めはもちろんですが、このドーバー・ヒルには独特の「オリンピック」競技があるのだそうです。時の国王ジェイムズI世が1612年に、これらの競技会をここドーバー・ヒルで開催する許可を出し、それ

以来、毎年5月に競技会が開催されています。でもピーターはこう付け加えました。「ゴンちゃん、この競技は本当のオリンピックの競技とはかなり異なる競技であることに注意しないといけないよ。」と。それは、2つのチームがお互いにロープを引っ張り合う綱引きや、お互いの脚を蹴ってどちらかが倒れるまでただ相手を巻き込むというすね蹴りのような奇妙な競技もあるのだそうです。「百聞は一見にしかず」とゴンちゃんはこの競技会を見たくまりました。ピーターはその競技会が開催される5月1日にゴンちゃんをまた連れてくるということと、もう一つの5月のイベントのメイポール (May Pole) の周囲で踊る「5月祭」も見ることが約束したのです。

立ち去る前に、2匹の猫はドーバー・ヒルのてっぺんからの素晴らしい眺めに見とれてしまいました。晴れた日にはバース (イギリス南西部のエイボン川に臨む都市) を見ることができますが、今日は午後遅くから雲が出てきたので、コッツウォルズの盆地の町の眺めを楽しんでとても満足しました。まわりのはちみつ色をした石は沈む冬の太陽の黄色く燃えるような色が反射しているようでした。暗くなるにつれ、何匹か地元の犬が姿を現しました。彼らはかなりフレンドリーなのですが、用心のためもあり、ゴンちゃんとピーターはストラットフォードへ戻るのにより時間だと判断し帰路につきました。

#### エピソード4 1月22日「フラワーズ・ビター –イギリスの象徴的なビールの味わい」



© 松井寿男

ピーターが突然奇妙な質問をした時、ゴンちゃんはシェイクスピアホテルのこぢんまりしたバーの腰掛けに座っていました。「ゴンちゃん、僕たちは何を飲んでいるの？」ゴンちゃんは目の前の黒味がかっ

た茶色の液体を見て答えました。「ビールだよ、もちろん。」「そうだね。」とピーターは言いました。「でもこれはイギリスのビールだよ。ぼくらは『エール』とか『ビター』と呼んでいるんだ。そして僕たちはどこで飲んでいるだっけ？」ゴンちゃんは答えました。「バーだよ！なんておかしな質問をするんだい、ピーター！もう君、酔っ払っているのかい？」「違う、違う。」ピーターは手を振って答えました。「すごくいい質問だね。このシェイクスピアホテルもバーというよりもパブの方が好ましいし、そのパブには宿屋という意味もあるんだよ。イギリスの生活文化の大切な一部だからパブやビターについて学ぶのもいいことだと思うよ。ねっ！ゴンちゃん。」

ピーターはイギリスの社交生活の中心であるパブについてゴンちゃんに話し始めました。「『パブ』は『パブリックハウス』の略語でね、過去には、誰もが入ることができて、ビールや食糧を買うことのできる家庭向きの家を意味していたんだよ。もしそこが宿屋もついていたらそこで寝ることもできたみたいなんだ。イギリスの村にはパブがいくつもあり、ストラットフォードでもそれぞれの通りに1つか2つのパブが必ずあったんだ。パブはお酒を飲む場所として存在していたのは間違いなかったんだけど、それだけではなく、そこは地元民や観光客が世間話を交わしたり、仕事について話し合ったり、仕事の後でくつろぐ集会場でもあったんだ。そして最近では、ほとんどのパブが昼食時や夕方の早いうちなら簡単な食事を出してくれるように、だれもがパブを楽しむことができるんだよ。パブには普通はウエイターの接客がないから、自分がバーカウンターに近寄って注文し、自分の飲みもののお金を払い、注文した品を自分でテーブルに持っていくんだ。後払いの形式はなく注文するのと同時にその飲み物のお金を払ってしまうのが原則だね。もう一つ大事なことがある。もしイギリスの猫たちと一緒に飲んだら、全員のお酒をいっぺんに買うのが普通でね。つまり誰かが全員のお酒代を払い、次回は他の猫が払うというシステムなんだよ。」

ゴンちゃんはピンときてバーカウンターまで行き、女性のバーテンのセルマに全員のお酒を頼みました。「ビールを2杯ください。」と言いました。でもセルマは困惑した表情をしています。彼女はゴンちゃんに聞きました。「パイント、それともハーフ？ビター？それともラガー？」ピーターが間に入って助けてくれました。「2パイントのビター、それもフラワーズビターをお願いします。」とピーターは注文しました。ピーターはバーカウンターに行く時には自分の欲しい分量も言う必要があると説明してくれました。イギリスでは今ではメートル法やリットルを使いますが、ビールを注文するときは古くからのパイント計量法をいまだに使っています（1パイントは約18リットル）。もし、のどがすごく渴いていたら1パイント、それより少ない分量はハーフです。そのとき何のビールを飲みたいのかも言う必要があります。ビールは「ビター」と「ラガー」の2種類が普通です。ビターは伝統的なイギリスのビールで、ラガーはもとはドイツから来たもので、ここ最近20年で人気になりつつあり、特に若い猫たちに人気だそうです。

ゴンちゃんはだんだん困ってきました。お酒の注文方法が想像していたより複雑だったのです。「心配いらないよ!」とピーターは言いました。「たくさんの異なる種類のビールがあるし、日本のものもあるよ。いくつかの名前をすぐに覚えるよ。僕がゴンちゃんに教えてあげるよ。まずはビターカラガーのどちらを飲みたいかを決めて、あのセルマに銘柄を選んでもらうよう頼んでごらんよ。それでなかったら、バーカウンターでビールのたる酒を指でさし示してもいいんだよ。」「うん、わかった。」とゴンちゃんは答えました。「でも教えてよ、ビターとラガーの違いって一体何なの?」

ピーターによるとラガーはドイツのビールに一番似ていますが、ベルギーや日本のビールにも似ているそうです。ラガーは黄色い色をしていて冷たくして飲みます。一方、イギリスのビターは黒味がかかった茶色をしていて約12℃もしくは常温で飲むのが普通です。ラガーは、たいていは自然な二酸化炭素が混ざっているので泡立っていますが、ビターにはそんなにガスがありません。実際、風味とコクのあるビターは自然の樽か貯蔵樽から供給され、バーテンダーが貯蔵樽からグラスへ移すために手製のポンプを使うのが一般的だそうです。

ピーターの説明は続きます。その名前にもかかわらずイギリスのビターは味としてはそんなに苦くはありません。実際には多少甘いといってもいいくらいです。発酵過程はラガーより早く少量の砂糖がアルコールに変わるのでビターはラガーよりしばしば甘みを含み、厚みがあり豊かなボディ(コク)になるのです。エステルと呼ばれる物質が苦味を残しつつフルーティーさを出し、バターのような味を出します。ラガーは日本のビールのように口の中ですっきりとした喉越しの良い味わいで、おそらく特に暑い気候の時に飲むと爽やかな気分になりますが、ビターにはそれにはない面白い複雑な味わいがあります。ラガーはたいてい中濃度(5%)ですが、ビターのアルコール量は品によって大きく変わります。それは夏向きの3%のビールから“Winter Warmers”という6%から7%のビールまで幅があります。もし濃度について確かでなかったら、たいていバーの樽の栓に示されているので参考になります。

ピーターによれば、シェイクスピアの時代には、子供も含めてたくさんの猫がビールを飲んでいました。1日に何ポイントか飲みましたが、それはアルコール度数がとても低いものでした。各家庭ではこの小さなビールでもあるビターを醸造していました。それは食事の時に飲む普通の飲み物でした。なぜならビターを醸造する過程は処理されていない水よりもとてもきれいで健康に良かったからです。今日でもまだ、イギリスの各地域や町には独特の異なった味をもつ地元特有のビターがあります。

ゴンちゃんは言うべきことを学びました。シェイクスピアホテルで「1ポイントのフラワーズ・ビターをください」。でも「なんで、フラワーズという名前なの?」とゴンちゃんはピーターに尋ねました。ピーターは答えました、「ストラットフォードの地ビールは『フラワーズ』と言うのさ。なぜかという地元醸造所を始めた一家がフラワーズ家という名前だったからなんだ。イギリスのほとんどの地域でフ



ラワーズ・ビターを買うことができるけど、それはすべてがストラットフォードと結びついているよ。ほら見て、ビールの栓の上にシェイクスピアの写真があるでしょ？シェイクスピア自身はフラワーズ・ビターを飲んではいなかったと思うけど、エリザベス朝時代に飲まれていたビールはおそらく今僕たちが飲んでいるものとほとんど同じなんだよ。依然として、黒味がかかった茶色でフルーティーな味わいのもなんだ。それを好きな猫もいるし嫌いな猫もいるけど、試しに飲んでみる価値はあるよね。ビターはイギリスの生活の大切な部分なんだからね。」

ピーターがみんなの分を注文しにバーカウンターまで行った時に、ゴンちゃんはイギリスのビターが本当に美味しいと思い、できるだけ多くの種類のビターをこれから先の数ヶ月で試していこうと心に決めました。

## おわりに

はじめにでも触れましたが、本稿は私が英国に留学して以来、20年以上あたためていた企画の一部であり、それをこのような形で世に出していただけることに私個人としては、非常に感謝しております。しかしながら、本拙稿が尊敬する伊藤典子教授の退官記念の研究紀要の一部となってよいのかについてはなほだ自信がございません。伊藤教授をはじめとした皆様の寛大なお心をもってご容赦いただけることを心より願っております。なお本稿の執筆にあたりまして、母校ウォーリック大学のピーター・ブラウン先生と高千穂大学OGの新井瞳さんからアドバイスを受け、校正段階では、東海大学の藤田玲子先生、高千穂大学の徳田治子先生からご意見を頂きました。もう少して19歳になる愛猫ゴンちゃんと共に深謝いたします。

### 執筆者

寺内 一（てらうちはじめ）

高千穂大学商学部教授・一般社団法人大学英語教育学会副会長

慶應義塾大学法学部法律学科卒業後、英国ウォーリック大学大学院英語教育学研究科で英語教育学博士号（PhD）を取得しました。拙著のひとつである『ビジネス・キャッツ—プロジェクトで学ぶ実践ビジネス英語』【寺内一編著】（南雲堂、2010年）のカットも本稿の松井寿男氏に担当していただいております。

### カット・デザイン

松井寿男（まついとしお）

イラストのほか、粘土から温かみのある動物たちを作り続けています。

<http://www.occn.zaq.ne.jp/tm-kobo/profile/index.html>